K

現代の文学＝40

三島由紀夫集

潮騒
美徳のよろめき
禁色

河出書房新社

現代の文学 40　三島由紀夫集

© 1964

責任編集

川端康成　丹羽文雄
円地文子　井上　靖
松本清張　三島由紀夫

昭和39年 3 月 5 日　初版印刷
昭和39年 3 月 10 日　初版発行

定価　390円

著　　者　三島由紀夫
発 行 者　河出孝雄
印 刷 者　高橋武夫
装　　幀　原弘(N. D. C)

印　　刷・大日本印刷株式会社
本文用紙・本州製紙株式会社
函　　貼・神崎製紙（ミラーコート）
同 納 入・東邦紙業株式会社
クロース・日本クロス工業株式会社
同 納 入・株式会社小島洋紙店

発 行 所　東京都千代田区神田小川町三の八　株式会社　河出書房新社

電話東京（291）3721～7
振替口座 東 京 10802

製本・小高製本

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

潮騒……三
美徳のよろめき……九五
禁色
第一部……一九三
第二部……三六七

年譜……五三
解説……奥野健男……五九

挿画　生沢朗
写真　三木淳

试读结束：需要全本请在线购买： www.erton

三島由紀夫集

潮(しお)

騒(さい)

第一章

歌島は人口千四百、周囲一里に充たない小島である。

歌島に眺めのもっとも美しい場所が二つある。一つは島の頂きちかく、北西にむかって建てられた八代神社である。

ここからは、島がその湾口に位いしている伊勢海の周辺が隈なく見える。北には知多半島が迫り、東から北へ渥美半島が延びている。西には宇治山田から津の四日市にいたる海岸線が隠見している。

二百段の石段を昇って、一双の石の唐獅子に戍られた鳥居のところで見返ると、こういう遠景にかこまれた古代さながらの伊勢の海が眺められた。もとはここに、枝が交錯して、鳥居の形をなした「鳥居の松」があって、それが眺望におもしろい額縁を与えていたが、数年前、枯死してしまった。

まだ松のみどりは浅いが、岸にちかい海面は、春の海藻の丹のいろに染っている。西北の季節風が、津の口からたえず吹きつけているので、ここの眺めをたのしむには寒い。

八代神社は綿津見命を祀っていた。この海神の信仰は、漁夫たちの生活から自然に生れ、かれらはいつも海上の平穏を祈り、もし海難に遭って救われれば、何よりも先に、ここの社に奉納金を捧げるのであった。

八代神社には六十六面の銅鏡の宝があった。八世紀頃の葡萄鏡もあれば、日本に十五六面しかない六朝時代の鏡のコピイもあった。鏡の裏面に彫られた鹿や栗鼠たちは、遠い昔、波斯の森のなかから、永い陸路や、八重の潮路をたどって、世界の半ばを旅して来て、今この島に、住みならえているのであった。

眺めのもっとも美しいもう一つの場所は、島の東山の頂きに近い燈台である。

燈台の立っている断崖の下には、伊良湖水道の海流の響きが絶えなかった。伊勢海と太平洋をつなぐこの狭窄な海門は、風のある日には、いくつもの渦を巻いた。水道を隔てて、渥美半島の端が迫っており、その石の多い荒涼とした波打際に、伊良湖崎の小さな無人の燈台が立っていた。

歌島燈台からは東南に太平洋の一部が望まれ、東北の渥美湾をへだてた山々のかなたには、西風の強い払暁など、富士を見ることがあった。

名古屋や四日市を出港し、あるいはそこへ入港する汽船が、湾内から外洋にちらばった無数の漁船を縫って伊良湖水道をとおるときに、燈台員は望遠鏡をのぞいていて、いちはやくその船名を読んだ。

レンズの視界に、三井ラインの貨物船、千九百噸の十勝丸が入ってくる。菜っ葉服の船員が二人、足踏みをしながら話しているのが見える。

しばらくして又、英国船タリスマン号が入港する。上甲板で輪投げをしている船員の姿が鮮明に小さく見える。

燈台員は番小屋の机に向って、船舶通過報の帳面に、船名と信号符号と通過時分と方向とを記入する。それを電文に組んで連絡する。そのおかげで港の荷主は、はやばやと準備にかかれるのであった。

午後になると燈台のあたりは、没する日が東山に遮られて、翳った。明るい海の空に、鳶が舞っている。鳶は天の高みで、両翼をためすようにかわるがわる撓らせて、さて下降に移るかと思うと移らずに、急に空中でとずさりをして、帆翔に移ったりした。

日が暮れはてたころ、一人の漁師の若者が、手には巨きな平目をぶらさげて、村から燈台へむかう登り一方の山道を急いでいた。

一昨年新制中学を出たばかりだから、まだ十八である。背丈は高く、体つきも立派で、顔立ちの稚なさだけがその年齢に適っている。これ以上日焼けしようのない肌と、この島の人たちの特色をなす形のよい鼻と、ひびわれた唇を持っている。黒目がちな目はよく澄んでいたが、それは海を職場とする者の海からの賜物で、決して知的な澄み方ではなかった。彼の学校における成績はひどくわるかったのである。

今日一日の漁の仕事着のまま、死んだ父親の形見のズボンと粗末なジャンパアを身に着けている。

若者はすでに深閑としている小学校の校庭を抜け、水車のかたわらの坂を上った。石段を昇って、八代神社の裏手に出る。神社の庭に夕闇に包まれた桃の花がしらじらと見える。そこから燈台まで十分足らず登ればよいのである。

その道は実に崎嶇としていて、馴れない人は昼でもつまずくだろうが、若者の足は目をつぶっていても松の根や岩を踏み分けて行くことができた。今のように、もの

试读结束：需要全本请在线购买： www.erto

を考えながら歩いていてさえ、つまずかない。

先刻、まだ残照のあるうちに、若者をのせた太平丸は歌島港にかえった。若者は舟主ともう一人の朋輩と一緒に、毎日このエンジンのついた小舟に乗って漁に行くのである。港へかえって、組合の舟に漁獲を移して、浜へ舟を引きあげてから、燈台長の家へもってゆく平目を手にさげて、若者が家へひとまずかえろうとして浜づたいに来たときに、暮れかけた浜は、まだ多くの漁船を浜へ引き上げる掛声でさわがしかった。

一人の見知らぬ少女が、「算盤」と呼ばれる頑丈な木の枠を砂に立て、それに身を凭せかけて休んでいた。その枠は、巻揚機で舟を引き上げるとき、舟の底にあてがって、次々と上方へずらして行く道具であるが、少女はその作業を終ったあとで、一息入れているところらしかった。

額は汗ばみ、頬は燃えていた。寒い西風はかなり強かったが、少女は作業にほてった顔をそれにさらし、髪をなびかせてたのしんでいるようにみえた。綿入れの袖なしにモンペを穿き、手には汚れた軍手をしている。健康な肌いろはほかの女たちと変らないが、目もとが涼しく、眉は静かである。少女の目は西の海の空をじっと見つめている。そこには黒ずんだ雲の堆積のあいだに、夕日の一点の紅いが沈んでいる。

若者はこの顔に見覚えがない。歌島には見覚えのない顔はない筈だ。他者は一目で見分けられる。と謂って、少女は他者らしい身装はしていない。ただ、海に一人で見入っているその様子が、島の快活な女たちとはちがっている。

若者はわざわざ、少女の前をとおった。子供がめずらしいものを見るように、正面に立ってまともに少女を見た。少女はかるく眉をひきしめた。目は若者のほうを見ずに、じっと沖を見つめたままであった。

無口な若者は、検分がすむと足早にそこを立去った。そのときはただ好奇心を充たされた幸福にぼんやりしていて、さて、こんな失礼な検分が彼の頬に羞恥を呼びさましたのは、ずっとあと、つまり、燈台へゆく山道をのぼりかけている時になってであった。

若者は松並木のあいだから、潮のとどろきの昇ってくる眼下の海をながめた。月の出前の海は大そう暗かった。

出会頭に丈の高い女の妖怪が立っているという伝説のある「女の坂」を曲ると、燈台の明るい窓が高く見えはじめる。その明るさは若者の目にしみた。村の発電機は久しく故障で、村ではランプの光りしか見ることがなかったから。

こうして燈台長のところへたびたび魚を届けに行くのは、燈台長に恩義を感じているからである。新制中学の卒業の際、若者は落第して、もう一年卒業を引き延ばされそうになった。燈台のちかくへいつも焚付けの松葉をひろいに行くので、燈台長の奥さんと近づきになっていた母親は、息子の卒業を引き延ばされては、生計が立ちゆかないと奥さんに愬えた。奥さんは燈台長に話し、燈台長は昵懇の校長に会いに行った。おかげで若者は、落第を免かれて、卒業することができたのである。

学校を出て、若者は漁に出る。ときどき燈台へ獲物を届ける。買物の用を足してあげる。そういうことから、燈台長夫婦に大そう可愛がられるようになった。

燈台へ昇るコンクリートの段々の手前に、小さな畑を控えた燈台長の官舎があった。厨口の硝子戸に奥さんの影がうごいている。食事の仕度にかかっているらしい。若者はそとから声をかけた。奥さんは戸をあけた。

「おや、新治さんねー」

目をうけとると、奥さんは高い声でこう呼んだ。

「お父さん、久保さん　お魚を」

奥から燈台長の質朴　声がこう応えた。

「いつもいつもありがこう。まあ上ってゆきなさい、新治君」

若者は厨口に立ってもじもじしている。平目はすでに、白い琺瑯の大皿に載せられている。かすかに喘いでいるその鰓からは、血が流れ出て、白い滑らかな肌に滲んでいる。

第二章

あくる朝も、新治は親方の舟に乗り込んで漁に出た。海のおもてには、薄曇りの夜明けの空が白く映っていた。

漁場までは約一時間かかる。新治はジャンパアの胸から、ゴム長の膝まで届く、黒いゴムの前掛をして、手にはゴムの長手袋をはめている。そして舳先に立って、舟の向ってゆく灰色の朝空の下の太平洋の方角を眺めながら、昨夜燈台からかえってから寝るまでのことを考える。

……竈のそばに暗いランプを吊した小さな部屋で、母親と弟は新治のかえりを待っていた。弟は十二歳である。父が戦争の最後の年に機銃掃射をうけて死んで以来、新治がこうして働きに出かけるまでの数年間、母は女手一つで、海女の収入でもって、一家を支えて来たの

である。
「台長さんは喜んどたやろ」
「おお、家へ上れ上れ言うて、ココアちゅうもん、よばれて来た」
「ココアたら何や」
「西洋の汁粉みたいなもんや」
母は料理を何も知らない。蒲身にするか、酢のものにするか、それとも丸ごと焼いてしまうか、煮てしまうかするだけである。皿の上には新治のとってきた魴鮄が丸ごと煮られている。ろくに洗わないで煮るものだから、魚肉を嚙む歯はしばしば砂を一緒に嚙んだ。
新治は食卓の話題に、母親の口から、あの見知らぬ少女の噂が出ることを待ちのぞんだ。しかし母親は、愚痴も言わず、人の噂もしたがらない女である。
食後、弟をつれて銭湯へゆく。銭湯でその噂をききたいと思ったのである。時刻がおそかったので、大そう空いていて、湯も汚れていたが、天井に胴間声を反響させて、漁業組合長と郵便局長が、湯槽につかったまま、政治問題を論じていた。兄弟は目礼をして、端のほうへ浸った。いくら聴耳を立てていても、政治論はなかなか少女の噂へは移ってゆかない。そのうちに弟がはやばやと出てしまったので、新治も一緒に出てわけをたずねると、弟の宏はきょう剣戟ごっこをして、組合長の息子の頭を刀で擲って泣かせたのであった。
その晩、寝つきのよい新治が、床に入ってからいつまでも目がさえているという妙な事態が起った。一度も病気をしたことのない若者は、これが病気というものではないかと怖れた。
……そのふしぎな不安は、今朝もまだつづいている。しかし新治の立つ舳先の前には、広大な海がひろがっており、その海を見ると、日々の親しい労働の活力が身内にあふれて来て、心が安まるのを覚えずにはいられない。エンジンの震動に舟は小きざみにふるえ、きびしい朝風は若者の頬を搏った。
右方の断崖高く燈台がすでに光りを納めている。早春の褐色の木々の下に、伊良湖水道の波が上げる飛沫は、曇った朝景色のなかの鮮やかな白である。太平丸は、親方の手馴れた櫓捌きで水道の渦潮をなめらかに乗り切ったが、巨船ならばその水道をゆくには、いつも水が泡立っている二つの暗礁の間の細い航路を通らなければならぬ。航路の水深は八十尋から百尋であるのに、暗礁の上は十三尋から二十尋の余しかなかった。そしてその航路標識の浮標のあたりから、太平洋の方向へ無数の蛸壷が沈めてあった。
歌島の年間漁獲高の八割は蛸であった。十一月にはじまる蛸の漁期は、春の彼岸にひらく槍烏賊の漁期を前

に、すでにおわりに近づいていた。伊勢海が寒いので、太平洋の深みへ寒を避けるいわゆる落蛸を、壺が待ちかまえていて捕える季節が終ったのである。

島の太平洋側の浅海は、熟練した漁師にとって、海底の地形をすみずみまで諳んじている自分たちの庭のようなものであった。

「海の底が暗かったら、あんまさんと一緒や」

とかれらは言い言いした。かれらは羅針盤で方角を知り、遠い岬の山々を見比べて、その較差で舟の位置を知った。位置を知って、海底の地形を知った。それぞれ百以上の蛸壺をつなぐロープは、幾列となく規則正しく海底に並んでいたが、ロープのところどころにつけられた多くの浮子は、潮の上げ下げにつれて揺れ動いた。漁の技術は、舟主でもあり親方でもある老練な漁撈長の手にあった。

新治ともう一人の若者龍二は、その身に適した力業にいそしめばよいのであった。

漁撈長大山十吉は、風によく鞣された革のような顔を持っていた。深い皺中までが日に焼けて、手などは、汚れの滲み入った皺とい漁の傷あとが見分けのつかないようになっていた。つたに笑わない人だったが、いつも平静で、漁の指図ために上げる大声も、怒りのためには上げることがなかった。

十吉は漁のあいだ、概して艫櫓の櫓場を離れずに、片手でエンジンを調節した。沖合へ出ると、今まで見えなかった多くの漁船が、そこに屯していて、お互いに朝の挨拶を交わした。十吉はエンジンの馬力を落して、自分の漁場へ着くと、新治に合図をして、調革をエンジンにつけさせ、それを舟べりのローラア・シャフトに巻かせた。舟が蛸壺の縄に沿って徐行するあいだ、このシャフトが、舟べりの外の滑車をまわし、若者たちは蛸壺の縄を滑車にかけて交代で引くのであった。しじゅう手繰っていなければ縄はともするとスリップしたし、また海水を含んで重たくなった縄を海から引き出すには、人の力の介添を必要としたのである。

水平線上の雲には薄日が籠っている。長い首を水面につきだして、二三の鵜が沖を泳いでいる。歌島のほうを見ると、南に面した断崖が、群棲する鵜の糞で、真白に染っている。

風はひどく寒かったが、縄を滑車に巻きつけると同時に、新治は深藍の海をのぞいて、その中から、やがて自分に汗をもたらすべき労働の活力が湧き昇って来るのを感じるのであった。滑車がまわりだす。濡れた重い縄が海から上って来る。新治の手は、手袋のゴムを隔てて、

冷たい堅固な縄を握る。手繰られた縄は滑車をとおるときに、氷雨のような繁吹をあたりに散らした。

次いで壷が海水からその赤土いろの姿をあらわす。龍二が待ちかまえていて、壷が空ならば、その壷が滑車に触れぬように手早く、それに溜っている海水をあけて、また海へ下降してゆく縄に委ねてやる。

新治は片足を舳先に踏んばり、足をひろげて、海の中の何ものかと永い綱引をつづけている。綱はつぎつぎと手繰られる。新治は勝っている。しかし海も実は負けてはいない。嘲けるように空の蛸壷をつぎつぎと送ってよこすのである。

七米から十米間隔の壷がすでに二十数個空である。新治は手繰る。龍二は水をあける。十吉は表情ひとつ動かさずに、櫓に手をかけて、黙って若者たちの作業を見戍っている。

新治の背には徐々に汗が滲んでくる。朝風にさらされているその額には汗が煌めいてくる。頬は火照ってくる。日がようやく雲を透かし、若者の躍動している姿の、その薄い影を足もとに映した。

上った壷を、龍二は海のほうへ向けずに、舟の中へ向けて逆さにした。十吉は滑車の動きを止め、新治ははじめて壷のほうをふりむいた。龍二は木の棒で壷のなかをつついた。なかなか出てこない。さらに壷を木の棒で掻きまわされて、蛸は、不承不承、昼寝の最中を起された人のように、全身を辷り出してうずくまった。機関室の前の大生簀の蓋が跳ねられ、今日の最初の収獲が、鈍い音を立ててその底へ雪崩れ落ちた。

午前中ほとんどを太平丸は蛸漁にすごした。収獲はわずか五疋であった。風が止み、うららかに日が照りだした。太平丸は伊良湖水道をわたって伊勢海にかえる。その禁止漁区で、こっそり掛漁をやるのである。

掛は、丈夫な釣針をつらね、舟を走らせて、海底を熊手のように引っかいて漁る方法である。釣針をつけた多くの縄は、ロープに平行にとりつけられ、ロープが水平に海に沈められる。一トしきりして引き上げると、四枚の鰯と三枚の舌平目が水を跳ねかえして上って来た。新治が素手でそれらを針から外す。鰯は白い腹をうかべ、血に塗れた舟板の上に倒れている。平目は皺に埋もれた小さな目に、その黒い濡れた体に、青空を映している。

中食の時間になった。十吉が獲物の鰯を、機関部の蓋の上で料理して刺身を作った。三人のアルミの弁当箱の蓋にそれが配られ、小さな瓶に入れて来た醤油がかけられた。三人は片隅に二三片の沢庵が押し込んである麦飯の弁当箱をとりあげた。舟はなだらかな波に委せられていた。

「宮田の照爺が娘を呼び戻したの知っとるか」と十吉が突然言い出した。

「知らん」

「知らん」

二人の若者は首を振った。そこで十吉は語りだした。

「照爺んとこは女が四人で男が一人やったがなあ、女がようけい（余計）おって、三人は嫁に行て、一人は養女にやられた。末の娘の初江ちゅうのが、志摩の老崎の海女のところへ貰われとったんや。ところがのう、一人息子の松兄が昨年胸の病いで死んでから、照爺は男やもめやし、急に淋しゅうなってしもたんや。初江を呼戻して、籍を戻してな、婿取りさせるつもりになったんや。初江はえらい別嬪に育ったで、若いもんが婿に来たがって、えらいことやろ。おまえら、どうや」

新治と龍二は顔を見合わせて笑った。たしかに二人とも顔を赤らめていたが、あまり日に焼けているので赤らみが見えないのである。

新治の心の中では、この話の娘と、きのう浜辺で見た娘の像とが、しっかりと結ばれた。それと同時に自分の財力の乏しさを思って自信を失くし、きのう身近に眺めた娘は、大そう遠くのほうにあるものに思い做された。宮田照吉は金持で、山川運送の用船（チャーター・シップ）になっている百八十五噸の機帆船歌島丸と九十五噸の春風丸の船主であり、獅子の鬣のような白髪をふるい立たせている名代（なだい）のがみがみ屋であったからである。

新治はいつも着実な考えをもっていた。自分はまだ十八だし、女のことを考えるのは早いと思っていた。多くの刺戟に触発される都会の少年の環境とはちがって、歌島には、一軒のパチンコ屋も、一軒の酒場も、一人の酌婦もなかったのである。そしてこの若者の簡素な空想は、将来自分の機帆船を持って、弟と一緒に、沿岸輸送に従事することであった。

新治のまわりには広大な海があったが、別に根も葉もない海外雄飛の夢に憧れたりすることはなかった。海は漁師にとっては、農民のもっている土地の観念に近かった。海は生活の場所であって、稲穂や麦のかわりに、白い不定形の穂波が、青ひといろの感じやすい柔土（やわつち）のうえに、たえずそよいでいる畠であった。

……とはいうものの、その日の漁の果てるころ、水平線上の夕雲の前を走る一艘の白い貨物船の影を、若者はふしぎな感動を以て見た。世界が今まで考えもしなかった大きなひろがりを以て、そのかなたから迫って来る。この未知の世界の印象は遠雷のように、遠く轟いて来てまた消え去った。

舳先の舟板には、一疋の小さな海盤車（ひとで）が乾いている。舳先に腰かけている若者は、夕雲から目を外（そ）らして、白

试读结束：需要全本请在线购买： www.erto